

ある少年のみた満洲

——竹内一郎の「満洲紀行」より——

解題

菅野 智博

はじめに

「満洲紀行」は、故竹内一郎氏（以下、一郎氏）が小学校5年の時に執筆した満洲訪問記録である。一郎氏は、母親と一緒に夏休みを利用して、新京に単身赴任中の父親故竹内亮氏（以下、竹内亮氏）に会うため満洲を訪問した。本紀行文は、一郎氏らが日本を出発する日（1940年7月24日）から新京を離れる日（1940年8月28日）までの見聞や感想などを記録している。本稿では、資料の掲載に至った経緯について紹介した上で、紀行文の内容及びその意義について言及する。

1 掲載経緯及び関連資料について

(1) 掲載経緯

本紀行文は、執筆者一郎氏のご息女である樋口優子氏によって提供された。樋口氏によれば、一郎氏は2014年の妻の死後から身の回りの物品を整理するようになり、満洲関連資料の保管先を何度も丁寧に樋口氏に伝えていた。一郎氏は資料



新京般若寺で撮影された家族写真
(1940年8月27日)

の内容について語らなかったものの、その貴重さを繰り返して強調していた。2016年に一郎氏が他界し、樋口氏は遺品を整理する際に、はじめてこれらの資料

を確認したという。樋口氏はこれらの資料を今後の研究に活用して欲しいという思いから、「満洲の記憶」研究会（以下、本研究会）のブログを通して連絡をくださった。そして、樋口氏のご厚意により、竹内亮氏及び一郎氏の満洲関連資料を本研究会に寄贈していただけることになった。

(2) 関係者略歴

それでは、竹内亮氏と一郎氏の略歴を簡単に紹介する。

竹内亮氏は、1894年に名古屋市で生まれ、1915年に北海道帝国大学農学部林学科実科に入学した。卒業後、王子製紙株式会社の苫小牧分社山林係での職務経験を経てから、1922年に九州帝国大学農学部植物学教室の助手となった。1925年に故瓜生眞子氏（以下、眞子氏）と結婚し、1934年1月に東京帝国大学にて農学博士を取得した。竹内一家にとって大きな転機となったのは1937年であった。竹内亮氏は、「満洲国」大陸科学院の嘱託として九州帝国大学で研究することになり、1939年8月から新京にある「満洲国」林野局林野実験室で勤務するため、単身で満洲に赴任した。また、1945年4月には一家をあげて渡満した。敗戦後、竹内亮氏は国立長春大学の創立に伴い、1946年から農学院森林系の教授として留用され、眞子氏と一郎氏も同伴した。1949年から東北師範大学教授兼生物系主任に就任し、約8年間教鞭をとっていた。そして、一



竹内亮氏と一郎氏
(1956年10月、北京北海公園にて)



竹内一郎氏
(1957年、東北師範大学にて)



竹内一郎卒業写真

(1954年7月13日、前から3列目、左から5人目は一郎氏)

家がようやく帰国できたのは1957年5月24日のことであった。その後、東北パルプ株式会社（後に十条製紙株式会社）の嘱託として1972年まで勤務した。また、帰国後も度々東北師範大学時代の教え子と連絡を取っていた。1982年に88歳で他界した⁽¹⁾。

一郎氏は1929年に竹内亮氏と眞子氏の長男として生まれた。1945年に母親の眞子氏と一緒に満洲に渡った。敗戦後、長らく家族と共に長春で生活し、1954年に東北師範大学物理学科を卒業した。また、留用期間中に父親の助手を担当することもあった。帰国後、株式会社本州製

紙に就職し、定年まで務めていた。父親と同じような職種に就職した背景には、竹内亮氏の紹介があったという。そして、仕事をしながらもラジオ講座などで中国語を熱心に勉強していた。2016年に87歳で他界した⁽²⁾。

(3) 関連資料

この度、ご寄贈いただいた資料は、大きく戦前のものと戦後のものに分けられる。

戦前のものには、一郎氏が執筆した「満洲紀行」の他に、絵葉書や各種観光案内、地図、写真、駅スタンプ、乗車切符などが

ある⁽³⁾。約 300 枚の絵葉書のなかには、貴重なものも多数含まれており、さらにセットで保存されている点も価値がある。これらの資料は、実際に戦前期に使用されていたため家族によって保存されてきた。

戦後のものには、1950年代に東北師範大学で撮影された写真、留用者を対象に発行されていた日本語新聞、中国語新聞の切抜、日本の家族に送っていた書簡、東北師範大学関係者との書簡などが含まれている。これらの資料は戦後の人間関係に基づくものであり、日本人の留用史を考える手がかりにもなるだろう。

2 紀行文の内容

本紀行文は、一郎氏が1940年の夏休みに単身赴任中の父親竹内亮氏に会いに行った際に執筆したものである。紀行文は、「門司より大連へ」、「大連から奉天へ」、「奉天から新京へ」の3部に分かれており、1940年7月24日に福岡県吉塚駅を出発してから、8月28日に新京で父親と別れる場面までの約1ヶ月間にわたる満洲旅行について記述されている。さらに、訪満中に撮影された写真も数枚保存されており、そこから旅行の様子をうかがえる。

本紀行文には以下の2点の特徴がある。

第1に、一郎少年の見聞や感想がそのまま子どもの目線や言葉で書かれている点である。船内で航空兵との会話、アジア号に乗った時の気持ち、同善堂を参観

した際の感想、「満人街」に行った時の感想、父親に会った際の嬉しさ、新京市内観光の感想などが記されている。例えば、アジア号の車内からみた光景のなかで、農家の家の形が「北支那式」から「北満式」に変わったということ、図画入りで紹介している。

また、紀行文のなかで「ヤンチョのニヤンが光子さんに何かいっていたが、光子さんがいきなり『ヤーメンソウワ』とおっしゃったら『ヤーメンソウワプシン。』』といて変な顔をした」という会話場面を書き残している⁽⁴⁾。戦前期、日本人は現地の「満洲人」とトラブルがあった際に、しばしば「ヤーメン」(役所)という表現を使っていた。すなわち、当時の日本人は役所に行けば守られると考えていたのである⁽⁵⁾。旅行者の一郎少年が、目の当たりにしたこの光景をそのままの話し言葉で記録していることが興味深い。

第2に、観光内容について詳細に記述されている点である。当該紀行文では、一郎氏と母親の眞子氏が参加した新京の観光ツアーについて大きく紙幅を割いて記述している。このツアーでは、まず忠霊塔、寛城子の記念碑、南嶺の記念碑などを参拝してから、「満洲国」の都市建設の状況を車内から観覧したり、動物園や「満人街」など新京市内各所を参観した。一郎氏らが参拝した南嶺の記念碑は、満洲事変を記念して建てられたものであり、満洲のなかでも広く知られているものであった。これらの記念碑や忠霊塔は、戦

死した日本人兵士を慰霊するためのものであり、植民地支配者が満洲における歴史記憶を構築するための装置でもあった。また、一郎氏らが参加した日本人観光ツアーは、戦跡観光と「国都開発」を結び付けていたことも注目に値する⁽⁶⁾。そこからわかるように、植民地支配者はツアーを通して満洲支配の正統性を喧伝し、さらには「満洲開発」に動員させていこうとしていた。そして、一郎少年も満洲国建設の宣伝文句をそのまま転写したという趣で、プロパガンダの影響を感じる。戦前期の満洲旅行記は数多く残されているが⁽⁷⁾、本紀行文のような小学生によって執筆された個人の日記形式の旅行記は非常に少ない。一郎氏の紀行文を他の旅行記や見聞録と比較対照することで、多様な年齢層の満洲像を理解することにつながると思う。

おわりに

本稿では、樋口氏によって寄贈された「竹内家コレクション」のなかの「満洲紀行」に焦点をあて、その内容及び史料価値について紹介した。寄贈された他の資料も大変貴重なものであり、それらについても今後目録化した上で、改めて紹介したい。

「満洲紀行」は、どのような経緯で執筆されたかは不明であるが、子どもの目線や言葉で書かれている同時代史料として大変貴重なものである。当該紀行文を他の旅行記や関連資料と対照しながら検

討することで、より多様な満洲像を解明することにつながるといえよう。

最後になるが、貴重な史料を本研究会に寄贈及び掲載承諾をいただいた樋口優子氏に衷心の謝意を示したい。また、竹内亮氏の経歴を調べるにあたり、「福岡山の会」の岡崎猷之氏及び「西東京自然を見つめる会」の中村賢司氏、竹内正彦氏（竹内亮氏の甥）から多くの関連資料を提供していただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

⁽¹⁾ 竹内亮氏の略歴については、福岡山の会『せふり』（第176号、1983年）及び創立25周年記念特集（1957年）に掲載された竹内亮「25年を終えて」を参照した。福岡山の会は、竹内亮氏が中心メンバーの一員として1932年に創立した山岳会である。竹内亮氏は、初代会長（1932年8月13日－1945年4月）を務めていた。第176号は「竹内亮先生追悼号」として、略歴や追悼記、関連資料などが掲載されている。

⁽²⁾ 竹内一郎氏の略歴については、ご息女の樋口優子氏の情報をもとにまとめたものである。

⁽³⁾ また、資料のなかには竹内亮氏の趣味であったハイキング関連のものや、調査で満洲各地を訪問した際に収集したものも一部含まれている。竹内亮氏は満洲に渡った後も福岡山の会に所属しており、しばしば『せふり』に寄稿していた。そこでは、様々な満洲の名山や珍しい植物について紹介している。また、『せふり』に「新京通信」という欄を設け、新京郊外でのハイキングやその道中の景観などについても寄稿して

いた。

(4) 「ヤーメンソウワ」は「ヤーメンに行こう」、
「ヤーメンソウワプシン。」は「ヤーメンに行く
のはダメ。」という意味であると思われる。

(5) 「土屋洗子氏インタビュー記録」2018年5
月9日、未定稿。

(6) この点については、荒山正彦「戦跡とノス
タルジアのあいだに——『旅順』観光をめぐっ
て」(『人文論究』第50巻第4号、2001年)が大
変示唆に富む。荒山は、「満洲国」期の日本人旅
順観光について、戦跡観光と自然の風景美との
関係に着目して分析している。

(7) 戦前期の満洲旅行記は、例えば、棟尾松治
『満洲見物・支那紀行』(大阪屋號書店、1922年)
や篠原義政『満洲縦横記』(国政研究会、1932年)、
臼井亀雄『開けゆく満洲』(日東書院、1933年)、
高橋源太郎『新満洲国見物』(大阪屋號書店、1933
年)、春山行夫『満洲風物誌』(生活社、1940年)、
三浦新一郎『国境記北』(増進堂、1943年)、小
此木壮介『だいれん物語』(吐風書房、1944年)
などがある。